

■第131回 み言葉に生きる招き 《解説と黙想》

●入城の福音 マタイ 21・1～11

エルサレム入城（受難の始まり）の場面です。オリーブ山はエルサレムの東にあり、ベトファゲ（地名：未熟ないちじくの家）は王が都に入城する直前の起点です。イエスは二人の弟子（申命記 19・15）を遣わし、王が使う平和な乗り物の子ろば（ゼカリヤ書 9・9）を準備させ、神の計画が実現します。エルサレムをシオンと言い、都を娘として、見よ…に乗り（ゼカリヤ書 9・9）との預言が成就します。王への敬意や服従を、ろばに服をかけて表し、王への歓迎行為（列王記下 9・13）が服を道に敷き、勝利を表して木の枝を道に敷きます。メシアの称号がダビデの子、救ってください（詩編 118・25）がホサナ、主の名……いと高きところ（詩編 118・26）と讃美し、群衆の期待は圧政からの解放です。都の人々は民衆の歓喜に戸惑い、群衆は「神の子」を預言者イエスと語るが、彼らはまだイエスの正体は知らない。

【著者の一言】 預言されていた主の受難が始まると思うと、胸が引き締められる思いがしました。

●第1朗読 イザヤ書 50・4～7

この箇所は「第三の僕の歌」と呼び、僕について次の三点が語られます。①神の声を「聞く」②神の言葉を「語る」③称賛と苦難に遭遇しても「従い続ける」。遣わす側（ヤハウェ）の者が、主なる神と言い、神の言葉を語る使命が、舌をわたしに与えと呼び、絶望の中での希望の言葉が励ます。神がその朝に与える言葉が、呼び覚ましと言い毎日、神の継続的な啓示を求める姿勢が、朝ごとにわたしの耳を呼び覚ましと言い、聞いたなら従います。神によって理解できる賜物が、耳を開かれたと呼び、自発的な従順が、逆らわずに逃げないと言います。不当な迫害者を、打とうとする者と言い、無抵抗な姿が、背中をまかせて、頬をまかせて復讐はせず、イエスに倣います。侮辱からは正しい方なので、嘲りとは思わず、決意が顔を硬い石のようにさせ、揺るがない信仰を表します。神が義とされるので、辱められることはなく、神の声に聞き従う弟子たちや信仰者の姿が示されています。

【著者の一言】 神に導かれて歩む者のプロセスと恵みの深さを、学ばせていただきました。

●第2朗読 フィリピへ手紙 2・6～11

この箇所は、キリスト賛歌と呼ばれ、① イエスは神ですが、十字架の死に至るまで神に従順を示され、ゆえに高く上げられます。② 信徒もイエスと同じ思いを抱く（フィリピ 2・5）よう、生き方の基本（へりくだり・自己放棄・従順）を勧めます。③ イエスは被造物の主であると宣言します。（イザヤ 45・23）自らの利益に使用しないことを固執しないと、イエスは神の特権を持ちながらあえて使わず、最も低い姿（奴隷）で仕え、神が真の人としてこられたのを、言は肉となった（ヨハネ 1・14）と言います。完全な服従の姿として十字架の死に至るまで、神の御声に耳を傾けて従い、従順のゆえに、復活・昇天・主権が神より授与され、高く上げられ主（ヤハウェ）の称号であるあらゆる名にまさる名が与えられました。全宇宙の存在である天上・地上・地下のものすべてが、イエスの主権の下に置かれ、すべての舌が、イエス・キリストは主であると告白し、父なる神の栄光となります。

●福音書朗読 マタイ 27・11～54

イエスは総督ピラトの前で尋問を受けますが、多くを語らず十字架を受け入れる態度を示します。イエスの王としての姿は、力でなく「へりくだり」支配でなく「犠牲」威厳でなく「忍耐」です。群衆がイエスを引き渡したのは妬みからで、バラバ・イエス「偽りの救い」を釈放させ、ナザレのイエス「真の救い主」を十字架につけよと叫びます。ピラトの妻は真実を語りますが、世の圧力をピラトは選びます。イエスに赤い外套を着せ、茨の冠を載せ、葦の棒を持たせ、兵士たちはユダヤ人の王万歳と言って、イエスを侮辱します。ピラトが水で手を洗い、責任回避と清めを宣言しますが、清めは神との関係回復によりなります。ゴルゴタで十字架につけられたイエスは、人々の嘲りと苦しみを受け、わが神、……お見捨てになったのですか（詩編 22・2）と叫ばれ息を引き取られます。この時、神殿の幕が上から下まで裂け、神と人との隔たりは取り除かれ、神への道が開かれます。（ヘブライ人 10・20）地は揺れ旧約時代、神に属する聖なる者たちの陰府での状態は終わります。これを見ておられた人々や百人隊長は、十字架のイエスこそ神の子だ、と告白します。イエスの死は、神の救いの計画が成就されたことを示しています。